

リラグルチドからリキシセナチドへの切り替えで

血糖コントロール良好となった血液透析患者の一症例

医療法人衆和会 長崎腎病院

○江藤りか 中島さゆり 小嶺真耶 矢野未来 佐々木修 一ノ瀬浩 橋口純
一郎 原田孝司 船越哲

【症例】

49歳男性、糖尿病歴20年、体重74kg、BMI24、GA26.8%、空腹時CPR9.4ng/mL
食肉加工業で食生活は不規則。昼食と遅い夕食を摂取

- #1 慢性腎不全（2008年血液透析導入）
- #2 糖尿病性網膜症
- #3 糖尿病性神経症
- #4 狭心症
- #5 逆流性食道炎

【経過】

インスリンデグルデク20単位とリラグルチド0.9mgで維持し当初のGAは26.6%であったが、その1か月後にはGAが34.1%と上昇し、CGMでも夜間の血糖が400mg/dLを超えるなどコントロールが悪化した。そこで、インスリン量は変えずにリキシセナチド20 μ g（10 μ g \times 2）に切り替えたところ、GAは27.1%まで改善し、CGMでも、一時的に血糖値が250mg/dLを示すことはあるが、日内変動は200mg/dL以下に収まっていた。

【考察】

GLP-1アナログであるリラグルチドの半減期は10~11時間で、一方、リキシセナチドの半減期は2時間である。1日2食の患者の食事時間に合わせて、リキシセナチドを使用することで血糖コントロールを改善することができた。しかし、添付文書とは異なる用法での治療は患者への十分な説明と同意の上で行い、副作用のモニタリングを注意深く行う必要がある。